

蜂巢蜂起 赤き女王に
集い

A L C アリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女王蜂は飛び立った

分蜂の地は巣となり

彼らが成す出来事は一大の世界的事件となる

それっぽく書いてみました

一応 I F の国土分割された世界です

目次

女王と気高き猿	1
女王には眩い朝が	11

女王と気高き猿

《夜の歓楽街。》

《カナリア達が鳴き始める夜更け》

日本共和国 通称 南側日本 首都トウキョウ 22:21

副都 シンジユク 駅前街道通り

通称 シン歓楽街

ドレスアツプした娼婦、高級士官、見スポラしい老人。張り切る中年男性。若い客引き

様々な人生に如何様な人生模様。明と暗がハッキリと色が付くことで煌びやかにその場所を彩っていた

二人の男女が賑わいの中走り回っていた

「フザケンジャネエぞ！くそツガキヤー！」

一人は冴えない中年、ホストのスーツ姿の男性

「ごめんなさいー！」

反対に豪華なドレス姿の華奢な絶世の美女

「お前が男なん、つて聞いて無エ！」

裏路地に入る頃には男は普段の不摂生が祟り。

若さの違いか男は肺も足も限界に近づき。脚をもつれさせ高く積まれた生ゴミの満載されたゴミバケツをひっくり返すように異臭のするソレを頭からかぶる

「お蔭で俺は今晚中にはコンクリ詰めです事中の高架の基礎に埋められて窒息死だッ
!!」

裏路地を覗き見る連中を構いもせず叫ぶ

追いかけられていた美女は足を止め。

振り返り、数歩近づき。俯き謝った

「ごめんなさい…」

「もういい。お巡りサンがもうすぐ来る、ここはそういう場所だ。田舎から出てきた時から上手くヤツてきたが、騙し騙され、ツキが俺の番だ」

もう帰れ。もう、ここにお前と俺に居場所何ざあ、ない

「…パパ、そう！パパに頼めば！」

顔を上げ名案を浮かんだようだ

「おめえの親が高級士官だろうとこの国のメンツは知ってるだろ？司法取引だって社会

主義の北と西。同盟国で民主主義の東に東南亜にさえこの国は侵食されて、汚職まみれつてニューヨークどころか国民は口々に：ガイジンのねーちゃん知らねえか：」

彼女はさらに俯く

「なんとか言え！これをやる。これでパスポートの無いお前でも国に帰れる：急げ！」
国の警備車が三台路地裏前に到着した大型のトラックも含まれている

更に路地裏の奥から一台の高級車が止まった。見られたく無く、回り込んだらしい
スーツ姿の人の良さそうな白髪の老齢の男性

もう一組は見た目は警ら重装機動警官だが全身サイボーグの高級品のオモチャだと
脳裡が囁いて居る

路地裏の男女二人は警ら重装機動警官等に直ぐさま囲まれた

老人は余裕を持って自らを睨む中年ホストの足元まで近づいた

「本日は、と。云いたい処だろう？」

「梟（フクロウ）・ルクルルか」

「左様。私は梟・ルクルル。北東からの脱出者（オーバー・マン）にして『政府の亀』とまで云われた『国唯一の良心』。『最後の愛国者』。ああ、君たち兵士からは『裏切り者』に施て忠臣』なんて謂われて居たねえ？」

「狙いは：今更『古いネット』。何かに興味は無いか：嬢ちゃんだろうか？」

左様。よく出来たな？《BR？》

「ヴァーチャル…ボーイ？」

彼女は首を傾げた

老人は小さな眩きを漏らさなかつた

『バーチャルボーイ』第一次生産性サイボーグの蔑称だ」

「赤と黒でしか色を認識できない、最初はステキな宣伝文句だ。」

「共産圏の赤、その裏に潜む真の敵。黒い悪魔の書記長を…と」

「補給は一月に電気とジュース缶サイズの補給のみ」

「戦争が終わるにつれ。仮の平和とは云え、邪魔者だったのだろうね。彼らの評価も赤と黒、資本主義と共産主義。主に自国の無能さの黒と敵の赤しか見分けられない盲目な兵士の政治的な揶揄表現だよ」

『なあ、感情を持った兵器』老人は耳元まで屈み、囁く

男は掴み掛からんとし。暴れ、警備官に抑えられる。

押えられた地面から老人を歯ぎしりして睨む

老人は打って変りその場で起き上がり少女を睨む

「マテギ・ミツギ・ヴィーチェ…」

「…ああ、今は源氏名はアリス…だったか？」

「なッ!？」

「《北の北 其の又北の王族》、生き残りだよ。忌々しい…」

「…ああ、心配しなくていい！君のパパはキミを売ったよ…」

そう言つて老人『フクロウ』は立体画面を高画質で証明を見せる

『国民と同等にして上澄みの暴力的支配者。国父』

『この現状を如何致すか？』

『彼女は知らない人間だ。我が国の知る領域ではない。君の所にでも勝手に処理してくれ…下らんことで連絡を超越すんじゃない…同志ホードビッチ…』

『同志オットーマン。之を処理しておくよ』

『アレの忘れ形見とは云え済まないな。いや、忘れてくれ』

『では早速取り掛かろう』

『以上だ。同志』

「また、会おう。同志と、いう訳だよ」

「君たち二人には消えてもらう。其れだけの業は深いだろう?」

フクロウは頸で部下に示すと

男女二人は後ろを縛り着けられ。膝を付き頭を地面に抑え銃を突き付けられていた

「私は優しい。だから君たちには遺言を残しても良いよ。大声で叫ぼうがいい」

どんなことでも!少女は尋ねる

「ああ!どんなことでも!」

「もう、ピーマンは食べます。我が俣は言わない。言いません!パパ! ПаПа! Па Па! お父さん!」

ここに來てマヌケな言い訳をする彼女に何故だかドキドキと胸が高鳴る

飛べないカナリアなんかじゃなかつたよ!

お母さん!

そう叫んだ瞬間

此処歓楽街の在る都心に爆音が響く

男が昔、戦場で散々聞いた事の或る音だった

2026年に始まった米日対露戦線　そこに投入された

「《M i l l 2 V C》！ あんな化け物が何故！」

『《M i l l 2 V C》ミル12ヴィシー』

最大乗員五百人

戦車二台。車両三台を持ち上げ

無補給飛躍距離1000km

旅客機並みの大きさを誇る

旅団規模の展開が即座に可能。

超音速ミサイルに対地機関砲、人間の体より太い対地ロケット。

対地、対空共に揃った空飛ぶ要塞……！」

近代化された

新民主ソヴィエト社会主義国

《NSVRR・ニエソヴィエトレーニンロード》

その国には恐ろしい化け物の巨人。『ゴリアテ』と西側諸国では恐れられていた

戦略ヘリコプター

コイツが前線に出てきた時の絶望は最新鋭駆逐艦の一隻と比例する

搭載されていた荷物の一部は降ろされていたらしい。

更には《白い悪魔・雪を血染めるタンクキラー》と呼ばれた部隊で愛用される

『75ミリ口径連装無反動砲』

競争化してゆくごとに巨大化し強化された戦車。其れを叩き潰すジャイアントキラー

アンチタンクの最新鋭部隊

「《GGBR》!」

「けつ。久しぶりだな。」

『Деструкция (デストラクチャー) : 《壊し屋》』

「それともDestruction specialty store?」

「うっせ! うっせい! モルガ! どの面下げて来やがった!」

「あら？ 戦場での銃弾のラブコールの跡が疼いて仕方ないわあ……」

彼女は男の頭を足蹴にすると甲高い金属音が響いた

彼は口の形を変えられそのまま沈黙させられた

が、依然彼女たちを睨んでいる

「止めて！」

これは、これは。と初めて気が付いたように静止するよう叫んだ少女マテギを熱っぽい瞳で見遣る

そして腕を横に薙ぐ、するとサイボーグ達は取り押さええる手を開放しマテギの体を支え

ゆつくりと座らせる

モルガ、四肢を金属の義体の彼女が近づくと甲高い金属音が蹄鉄のようにコンクリートに響き、マテギは身体を怯えさせる

貴族の男（おのこ）のように様に入った儀礼をマテギに捧げる

「今回我々が此処に来られた原因は陛下の本国の元首が変わりまして」

「私が、ワタクシが……槍玉に挙げられたのですか……」

賢い子……とモルガは眩しげに目を細めマテギの髪を梳くように撫でる

「その泥鼠も連れて征かねば為らないのは…如何にか為りませんか？」
立ち上がり平然としている老人を見やる

「同志《красный перец》 それとも三重スパイ『レッドペッパー』『フクロウ』？」

彼女は真を指す

いいえ、日本原産の四重スパイ…「サルトビ」

女王には眩い朝が

情報戦術ホログラフによりその真つ暗な一室は青く染まっていた

「赤きレッドカーペットは我々の進軍路よ、わかっているわね？」

老女の威厳ある声がそこに響いた

「はっ！女王陛下」

「よろしい、これを以下のコマンダーに伝達せよ」

此度、再びの戦火を交えんと

旧『茨城県』、現『極東大英帝国直轄地』となったこの地は俗に言う『保養地』として開発されており本来東側諸国との大使館の役割を成し

軍事拠点ではないとは彼らの本国の公式発言であり

（一）に

中央戦術級思考ユニット

『頭脳級王冠 ブレイン・キャリアー』

がブリテン本島から米国工廠経由で運び込まれる事態となったのは

将棋・囲碁・チェス、その他さまざまな娯楽の攻略目的のシステムから発展した西側諸国に非常に有利な状況を生み出してきた

『戦略行動ユニットの誤算』が発生し西側諸国のデタントへの流れを完全に打ち切る

キューバにならない

第二次大戦後の日本分割譲渡後の栃木県沿いの群馬からの越境や脱北などの北京軍の行為に緊張も高まり核戦争の危機に一度直面、一時期は紛争単位旧埼玉アメリカ領でテロが起き関連が疑われ二度目の危機感を煽った

今、西側諸国進行の日本共和国に旧西東京現新ソ連の領土から大量の戦略兵器の投入が確認され

『第三次極東核危機』が起らんとせぬばかりであったからだ

米国もこれに対し兵員の導入に国民の非難を実施

旧埼玉・現米領『イースト13』の兵員のスクランブルを呼びかけ

西側諸国本国ではそれぞれデフコンが『2』に引き上げられた

それに伴い大陸間弾道弾に戦略核弾頭の搭載、戦略エネルギー兵器、衛星兵器等のABC兵器が用意され、世界の終焉は近づいていた

『現在もシンジユク駅に戦略ヘリコプターの群れが何か建材の様な既に組

み上げられたものが運ばれています！高く異形に積み上げられ、まるで蟻塚のような様相を呈しています！』

テレビに映し出されたこれに各国は動揺を隠せない、奴らは何がしたいんだ、と

「プレジデント、あれは一種のリニアカタパルトの様な物、さらには核貯

蔵施設、核ミサイル発射台、レーザー砲塔、要塞等々、様々な憶測が飛び交いますが、諜報員からも混乱が見られ、全く全容がつかめません！」
大統領は怒りを露わにした

「極秘裏にあれだけの戦略兵力をこんな至近距離に隠していたとでも言いたいのか！」

西側が夜に近づくにつれ

極東の蟻塚と呼ばれ夜明けを迎えようとしていた

それは正にこれからの彼らの行動を示していたのかもしれない

「世界は闇に包まれ、我らだけが誰よりも新しい朝を迎える！」

「極東の朝はなんとすがすがしいのだろう」

「世界の週末もなんと眩しい光で終末を迎えそうだがな」

レーダーピットとして建造物から突き出た先端には

彼女『モルガン』と

四肢をパージされ、頭を掴まれた彼が

外された顎の奥に備えるスピーカーから皮肉を言いだした

「今回の事件は言うなれば『蜂巣蜂起』『赤き女王蜂に集った働き蜂』さ」

「これだけの戦力で『働き蜂』だと?」

「我らの指向は地面じゃないんだ」

彼の頭を持ち上げていた片腕を空中にぶらん、と晒すと

「さあ、我らとともに来るかね? ヤポーネ」

「ああ、ああここで死にたかないからな」

「くたばれくそつたれ」

その言葉を聞き終えると手を放し重力に従って彼は落下していった

建造途中の上層フロアで『サルトビ』に声を掛けられ不機嫌になっていた
モルガは女王の下へと向かうと

「あなたはおやさしいんですね」等と言われてしまいすっかり彼のことな

ど忘れ女王の王座の隣に立ち無表情で押し黙っていた

彼女の頭の中は女王との睦言の妄想で一杯であったことは怯える彼女には
言わぬが華だろう

「死ぬかと思った、重力に殺されかけるのは雪原にパラシュート無しで降
下した以来だな」

真下には対空ミサイルの設置の為に空きスペースがありそこに彼は落着し
ていた

「一体何の建造物なんだ、これは」

彼が横たわる場所の外壁には下弦の月と槌を持つミツバチを模った意匠が

ペイントされていた